対象：管理者 / 現場リーダー / 多職種連携担当

多職種連携の要諦：チームビルビルディング実装プレイブック

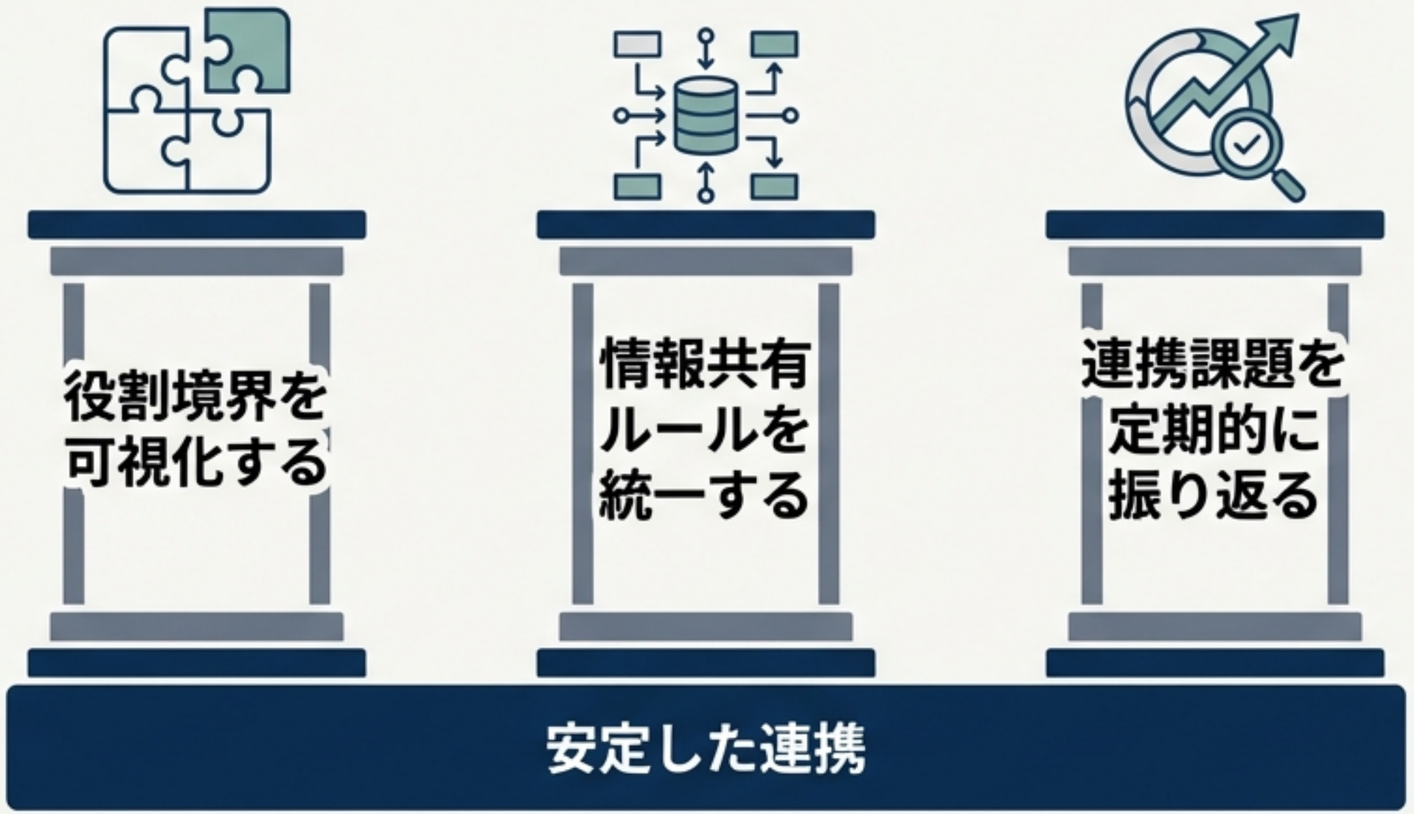
属人的な「相性」から脱却し、確実な「構造」でチームを動かす

NotebookLM

結論：連携は「仲の良さ」より「構造の明確さ」

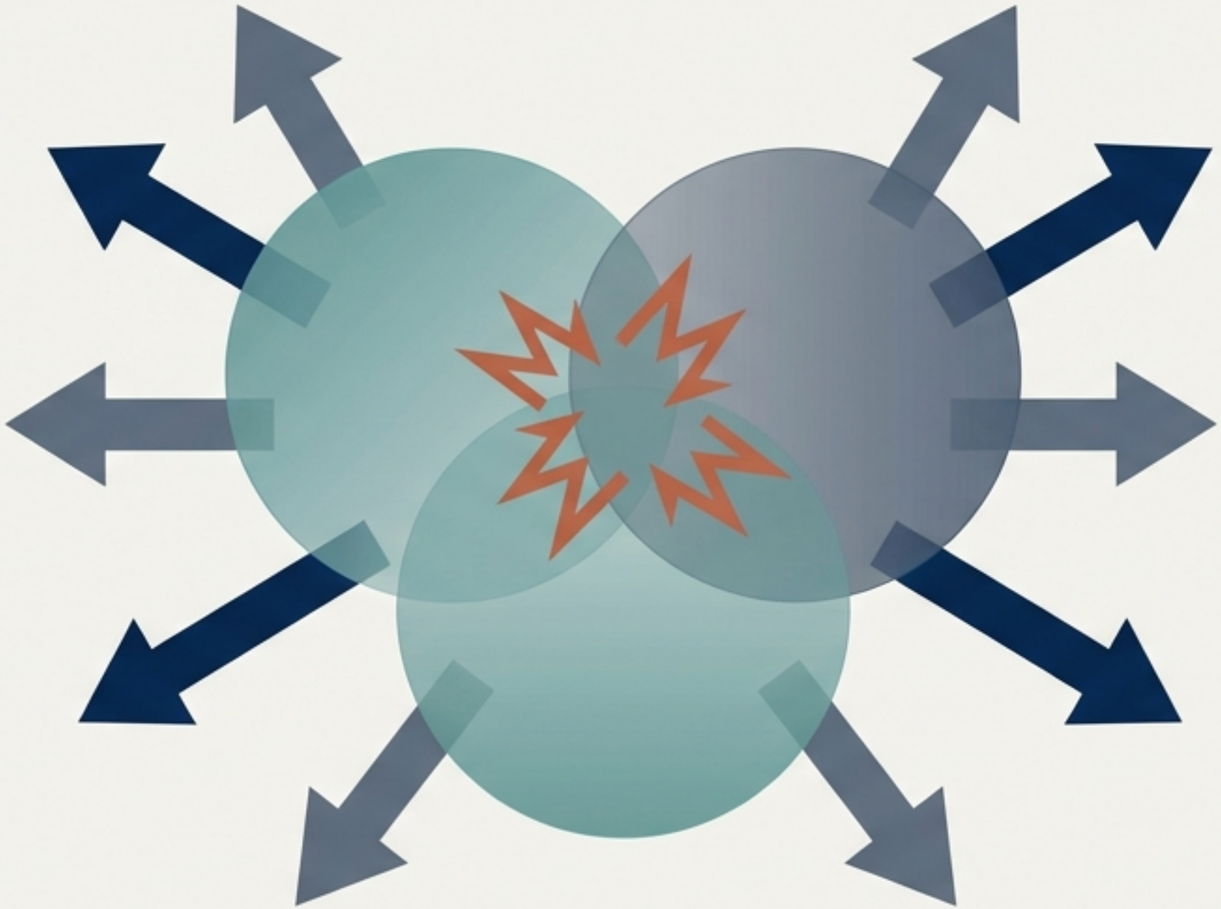
Key Insight Box

良い連携は、個人の相性ではなく、役割と情報共有の設計で作られます。役割と判断基準が明確なほど連携は安定します。



NotebookLM

専門性が増すほど、連携の難易度は跳ね上がる



- ⚠ 職種間で認識がずれる
- ⚠ 情報共有の粒度が不統一
- ⚠ 決定責任が曖昧

NotebookLM

現場で「連携不全」が起きやすい3つのシナリオ

Scenario 1



ケース会議

目的が職種ごとに異なる

Scenario 2



急変対応

連絡順と判断責任が不明

Scenario 3



計画修正

役割重複で実行遅延

NotebookLM

「善意」に依存するチームから、「構造」で動くチームへ

❌ 属人的な連携

- 個人の関係性に依存する
- 「仲の良さ」が最大の指標
- 結果：再現性が低く、ストレス下で崩壊する

✅ 構造化された連携

- 明確なルールと役割に依存する
- 「実行可能な構造」が最大の指標
- 結果：極めて安定し、拡張性があり、強靭

NotebookLM

確実な連携を生む5つの実装ステップ



NotebookLM

Step 1: 役割マトリクスで「責任の境界線」を明文化する

タスク	介護職	看護師	相談員
Task A（身体介助）	✓	✓	○
Task B（医療処置）	✓	✓	○
Task C（家族相談）	●	○	✓
Task D（計画作成）	✓	●	✓

Key Takeaway Box

職種ごとの責任範囲と連携ポイントを明文化します。境界を引くことで、ボールの落球と重複を防ぎます。

NotebookLM

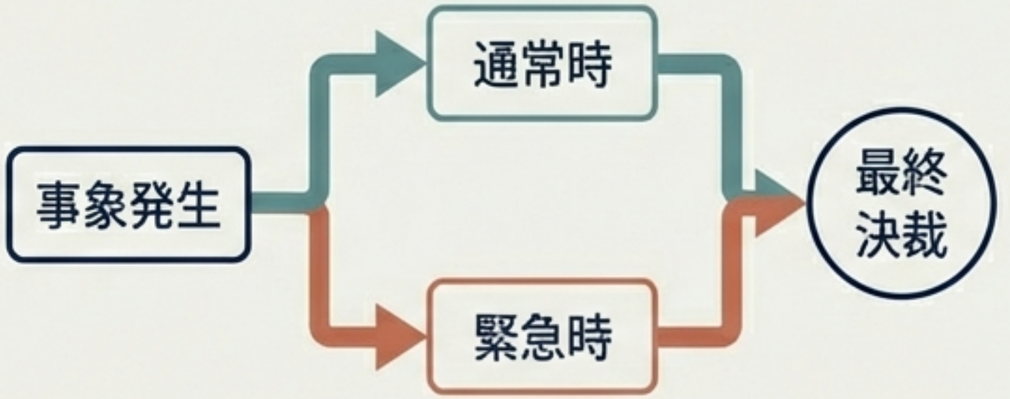
Step 2 & 3: 情報の「共有ルール」と「決裁ルート」を統一する

Step 2: 共有ルール標準化



- 記録様式、連絡タイミング、報告経路を統一します

Step 3: 意思決定フロー設計



- 通常時と緊急時の決裁ルートを分けて定義します

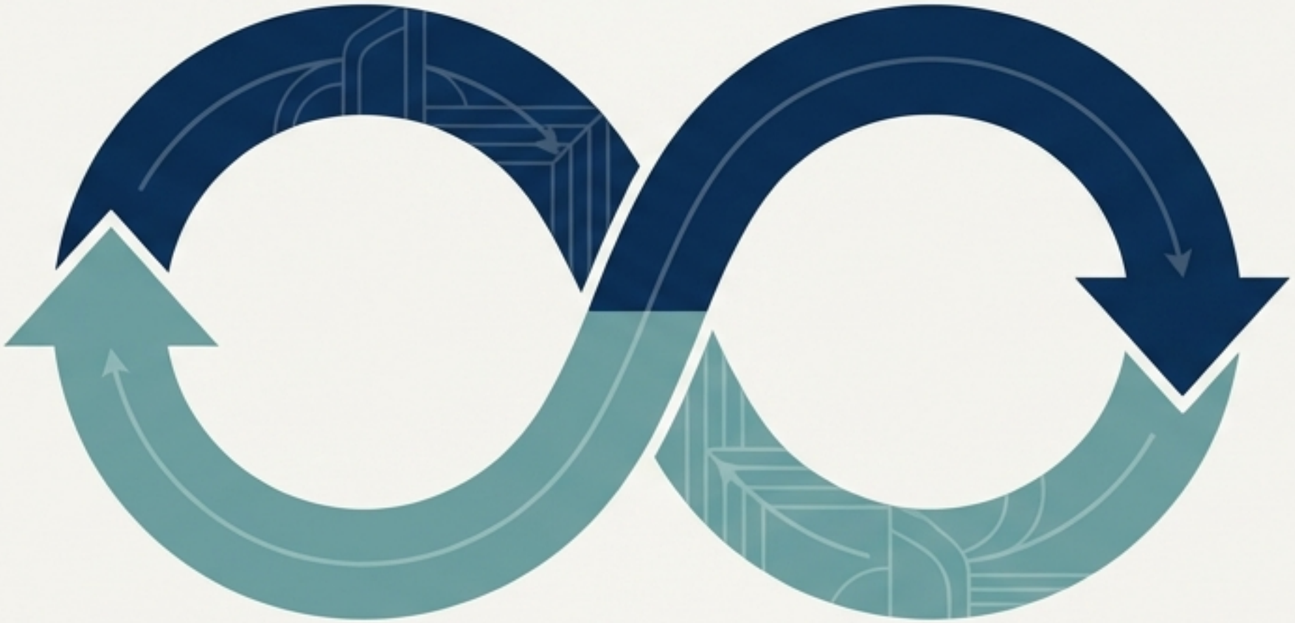
NotebookLM

Step 4 & 5: フィードバックループと「共通目標」を構築する



Step 4: 定例連携レビュー

連携不全事例を月次で振り返り、
ルールを修正します





Step 5: 共同成功指標の設定

職種別KPIだけでなく、共通KPIを
設定し協働成果を測ります

NotebookLM

ケーススタディ：AR事業所の変革プロセス

導入前の課題	実施内容	導入後の変化
職種間の情報ギャップで対応遅延	• 役割マトリクス導入 • 連絡ルール統一 • 月次連携レビュー実施	急変時対応速度が改善、会議での意思決定が明確化

成功要因：人間関係改善より先に構造改善を行ったこと

NotebookLM

よくある3つの失敗パターンとその回避策

失敗パターン1: 連携を善意に依存する	回避策: 再現性が低くなります。 構造化が必要です
失敗パターン2: 職種ごとに最適化しすぎる	回避策: 全体最適が崩れます。 共通KPIを設定してください
失敗パターン3: 課題共有を避ける	回避策: 関係悪化が固定化します。 レビューで対話してください

NotebookLM

連携状態を可視化するKPIダッシュボード

指標	定義	目標値	計測頻度
連携遅延件数	連携遅延の発生件数	前月比低減 	月次
意思決定明確率	会議決定事項の 責任明確割合	95%以上 	月次
共通KPI達成率	共通指標の達成割合	80%以上 	四半期

NotebookLM

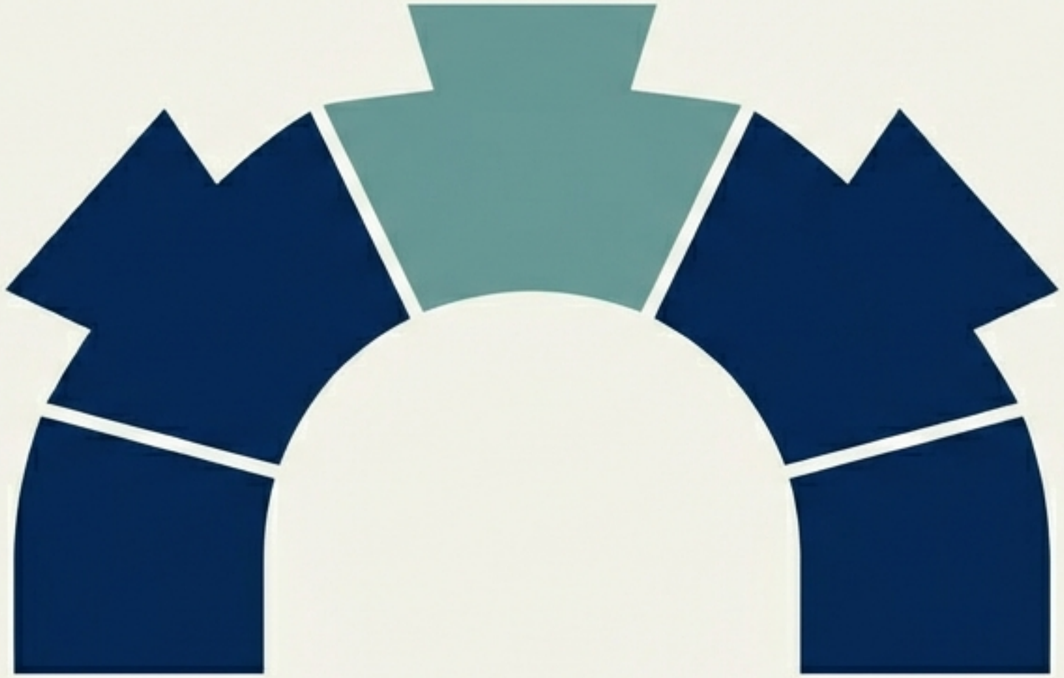
多職種連携・品質セルフチェックリスト

- [ ] 役割マトリクスがある
- [ ] 共有ルールが統一されている
- [ ] 意思決定フローが明文化されている
- [ ] 連携レビューを実施している
- [ ] 共通KPIが設定されている

※本設計は「障害者総合支援法」および「指定障害福祉サービス運営基準」の多職種連携関連資料に準拠した運用基盤となります。

NotebookLM

仕組みの設計が、持続可能なチームを作る



多職種連携は、仕組み設計で強くなります。
役割明確化、共有標準化、定期レビューを通じて、
継続可能なチームを作りましょう。

NotebookLM